

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：33301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05628・19K20834

研究課題名(和文)オスマン朝の宮廷儀礼に関する研究：15～16世紀を中心に

研究課題名(英文)A study on the Ottoman court ceremonials in the fifteenth and sixteenth centuries

研究代表者

川本 智史(Kawamoto, Satoshi)

金沢星稜大学・教養教育部・講師

研究者番号：10748669

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は15～16世紀オスマン朝の宮廷儀礼分析を目的とする。文献史料に加えて、建築史および美術史の手法を援用し、複合的に儀礼を復元する点に本研究の学術的独自性がある。宮殿の建築空間や儀礼の細密画における描写を詳細に分析し、断片的な文献史料の記述とあわせて、儀礼の復元に努めた。絵画史料からはスルタンとの謁見時に小姓らが左右に描かれると同時に、上座下座の区分があったとの事実を導き出した。さらにオスマン朝の覇権以前のアナトリアでは諸勢力が大規模な宮殿を造営する力を失い、その代替として高層建造物が選択されて謁見空間として用いられたことを文献史料の分析から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古今東西の宮殿は王朝にとっての最大の統治装置であり、秩序を可視化する宮殿での宮廷儀礼は政治の舞台となる。オスマン朝でも即位儀礼からはじまり、定例の閣議や君主拝謁に至るまで、主要な儀礼は帝都イスタンブールにあるトプカプ宮殿で開催された。儀礼を分析することで、政治の観点からは当時の宮廷組織や意思決定過程を解き明かすことが可能であるし、服装や食事など文化史の知見も得ることができる。また前近代を代表する王朝のひとつであるオスマン朝の宮廷儀礼を研究することにより、世界各国の王朝における儀礼との比較検討への道も開かれるはずである。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to analyze the Ottoman court ceremonials in the fifteenth and sixteenth centuries. In order to reconstruct the ceremonials, the author employed the methodologies of architectural history and art history alongside the historical approach to written documents. Here, palatial architecture and ceremonials took place there are examined in terms of spatial composition through the Ottoman miniature paintings and several fragmentary descriptions. The visual documents indicate the existence of a certain spatial hierarchy during the sultan's reception at the court. The Ottoman venue of the reception from the fifteenth century was a ceremonial courtyard in the royal palace, as opposed to the distribution of minor scale ceremonial belvederes in the pre-Ottoman Anatolia whose debilitating dynasties could not construct a dimensional royal abode.

研究分野：建築史

キーワード：宮殿 オスマン朝 儀礼

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

オスマン朝は、中東からバルカンにかけての広大な領域を 600 年以上にわたって統治した多民族多文化国家である。オスマン朝が統治した地域では、多様な現地の文化が内包されつつも普遍的で「オスマンの」ともいふべき文化と社会のありかたが成立し、現在に至るまで大きな影響を留めている。その中心に位置したのが帝都イスタンブルであり、さらにその政治的な核となったのがトプカプ宮殿であった。複雑な文書行政とこれを支える精緻な官僚機構、そして宮廷政治のほとんどはここで展開したのであった。

1453 年に征服されたコンスタンティノープルは、以降オスマン朝の首都イスタンブルとなって宮殿やモスク、商業施設群などが盛んに建設され都市インフラが整えられた。15 世紀後半からスレイマン 1 世の治世に至るまでの約 100 年間のうちに、オスマン朝は急速に領土を拡大し、中東イスラーム世界の超大国としてユーラシア大陸に覇を唱えた。その過程で政治体制の整備も進められ、小規模なオスマン王家の家政組織と有力家による不安定な連合政権は、スルタンの奴隷身分出身者が大宰相以下のエリート階級を形成する中央集権体制へと変貌を遂げた。主宮殿であるトプカプ宮殿は、スルタンと家族の住まいであるとともに、廷臣や臣民、外国使節が集って折衝を繰り広げる政治空間となった。

トプカプ宮殿での宮廷儀礼については、外国使節のものを中心に多くの記述が残されており、後述するようになんかの程度復元することが可能である。だが儀礼の発展期に相当する 15 世紀から 16 世紀前半にかけては外国人の記録も少ない。一方当事者であるオスマン朝が作成した膨大な公文書群は、とくに 16 世紀以降のものがよく保存・公開されて研究も進められているが、儀礼に関するものはごくわずかである。そのため当時の宮廷儀礼の詳細については、依然として検討の余地が大きい。もっとも重要であるはずの時期の宮廷儀礼の内容が、以上の理由により分析が進んでいないからこそ解明したいという動機が、本研究課題の核心にある。前近代を代表する王朝のひとつであるオスマン朝の宮廷儀礼を研究することにより、世界各国の王朝における儀礼との比較検討への道も開かれるといえる。

オスマン朝の宮廷儀礼や宮廷組織に関する古典的な研究としては、18 世紀末のドーソン (Tableau général de l' empire Othoman) や、20 世紀半ばに著されたウズンチャルシュルによる一連の著作 (Osmanlı Devleti Saray Teşkilatı, 1945 『オスマン朝の宮廷組織』など) がある。両者は儀礼についての広汎な史料を渉猟した成果であり、今日に至るまでその価値は失われていない。近年では 18～19 世紀の外国大使謁見儀礼に関する著作 (H. Karateke, An Ottoman Protocol Register, 2007) などがあり、史料の豊富な 18 世紀以降を中心に研究が進められている。宮殿に関する建築史研究ではネジプオールの研究 (G. Necipoğlu, Architecture, Ceremonial, and Power, 1991) が決定版であり、儀礼に関する紹介もある。美術史分野では、絵画中に描写された人物像について近年フェトヴァジュが重要な研究をおこなった (E. Fetvacı, Picturing History at the Ottoman Court, 2013)。また即位儀礼についてはエルトゥーの研究 (Z. Ertuğ, Cülûs ve Cenaze Törenleri, 1999 『即位と葬送儀礼』) が詳しい。

日本国内における関連するオスマン史研究についていえば、政治文化に関する鈴木董の浩瀚な研究や、公的文書についての高松洋一の研究、今澤浩二による初期オスマン朝の宰相制の研究がある。奥美穂子は 16 世紀のイスタンブルにおける王子割礼式典という都市ページエントの考察をおこなった。しかし宮廷儀礼そのものについての研究は管見の限り存在しない。

本研究は、申請者による宮殿建築研究の成果をもとに、建築史と美術史の手法を援用して宮廷儀礼を分析する点に特徴があり、きわめて画期的なものであるといえる。とくにその重要性にも関わらず研究が遅れる 15～16 世紀に取り組む点で、今後のオスマン史研究全般において大きなインパクトをもつものである。

### 2. 研究の目的

本研究は 15～16 世紀オスマン朝の宮廷儀礼分析を目的とする。先述の通り、文献史料には制約があるため、建築史および美術史の手法を援用し、複合的に儀礼を復元する点に本研究の学術的独自性がある。宮殿の建築空間や儀礼の細密画における描写を詳細に分析し、断片的な文献史料の記述とあわせて、儀礼の復元に努める。

席次や式次第など、宮廷儀礼の具体的な内容からはスルタンと廷臣との関係や宮廷組織の構造を読み取ることができる。同時に、服装や宴会における食事など文化史に関する情報も多く含んでいる。オスマン朝の宮廷儀礼の考察は、オスマン史研究の多様な分野に新たな知見をもたらすきわめて創造性に富む研究テーマであるといえる。さらに分析で得られた成果は周辺地域や他時代の宮殿儀礼と比較検討することによって、人類史上の権力のあり方や支配体系といった問題を読み解く手がかりとなる。

### 3. 研究の方法

本研究は、宮廷儀礼を建築・絵画・文献の三種類の史料を用いて研究する点に特徴がある。まず宮殿空間の分析についてのべる。具体的にはトプカプ宮殿における主要な儀礼空間だった第二中庭、新旧ふたつの閣議の間、謁見の間という三点に着目する。これらは 15 世紀半ばから 16 世紀にかけて漸次整備され、その都度ここでおこなわれる儀礼形態も変容したと予想される。またトプカプ宮殿創建以前の宮殿群の建築空間と儀礼を分析することにより、トプカプ宮殿においてどのような発展がみられたかを考察する。また玉座や長いす、暖炉の位置といった室内の

しつらえの変遷と儀礼内容の関連を分析する。

トプカプ宮殿以外にもオスマン宮廷は複数の宮殿を造営し、時に儀礼的に用いていた。なかでも重要なのが旧都エディルネに建設されたエディルネ新宮殿で、イスタンブル遷都後もエディルネに長期滞在するスルタンと宮廷の滞在先となった。エディルネ新宮殿の空間と儀礼を分析することで、オスマン朝の宮廷儀礼全体のプログラムを考察する。

これにあわせて用いるのがオスマン朝の宮廷工房で作成された細密画である。歴代スルタンの即位や遠征時の様子を描く一連の絵画は、美術的な価値だけでなく、参加者の位置や服装など、文献史料からはうかがい知ることのできない情報を伝える貴重な史料となる。具体的には16世紀後半に作成された『肖像の書』(Şemailname)や『技巧の書』(Hünername)に登場する儀礼場面を分析する。

以上から得られた知見は、文献史料によってその裏付けをおこなう。同時期の儀礼に関するオスマン語史料はごく限られたものにとどまるが、トルコ共和国首相府文書館に所蔵される財務関連の台帳類から宮殿建築の修復履歴や宴会の支出などを読み解く。さらに重要なのがヴェネツィアをはじめとする諸外国の使節による報告類で、使節謁見儀礼を中心として、宮廷儀礼の内容が記されており、分析に用いる。

宮殿での儀礼に加えて、スルタンの遠征時などに用いられた幕営群における儀礼もまた考察対象とする。遊牧民が主体となっていたテュルク(トルコ)・モンゴル系王朝では、伝統的な天幕や幕営設営の手法が継承されて独自の空間が出現し、むしろ首都内部の宮殿で宮廷生活が営まれる機会は少なかったことが知られる。オスマン朝はテュルク系ではあるものの、都市での盛んな建設活動から明らかなように早くから定住化の傾向を示し、宮殿が主たる儀礼空間となった。だが遠征中などには、幕営群が設営されて副次的な儀礼空間として用いられたため、宮殿における宮廷儀礼と比較対照が可能である。史料としては16世紀後半に作成された『スルターン・メフメト3世の王書』(Şehnâme-i Sultân Mehmed III)など、細密画を含む文献史料を用いる。以上の史料の複合的な分析により、宮廷儀礼における参加者やその席次、服装などを明らかとし、対象とする時期においてどのように変化を遂げたかを明らかにすることができる。これは同時に宮廷組織そのものや権力関係の変化も示唆するものであり、政治史など近接分野に対しても貢献するところが大きいと考えられる。

#### 4. 研究成果

研究成果としては次に示されるように学術論文を1本、学術図書や事典の項目を4本、学術誌に紹介記事を2本、国際学会での発表を1回、国内学会での発表を2回おこなった。その内容は本研究のテーマである15-16世紀オスマン朝の宮廷儀礼を一つの軸としつつ、首都イスタンブルをはじめとするオスマン朝の都市や、時代が下って20世紀初頭のトルコ共和国首都アンカラにおける都市儀礼までの幅広い内容を扱った。宮廷儀礼を起点として、王権や政府の権威が空間の中いかに投影されていくのかを明らかにすることに成功したといえる。

2018年と2019年の夏には、オスマン朝宮廷儀礼の比較考察として、ビザンツ宮廷およびマムルーク朝宮廷での儀礼に関する基本的史料および研究文献の調査を米国ハーバード大学図書館でおこなった。またこの際ハーバード大学に在籍する複数のオスマン史研究者との議論もおこなった。これらの海外調査で得られた成果については2018年9月にブルガリアで開催されたオスマン史学会(CIEPO)において“Edirne: The Cradle of Ottoman Palatial Architecture in the 15th Century”と題して発表をおこなっている。

具体的には次のような考察をおこない、分析を深めた。

まず絵画史料から16世紀末に作成された『技巧の書』(Hünername)に登場する儀礼場面の考察をおこなった。ここから、スルタンとの謁見時に小姓など特定の人物が左右に描かれると同時に、場面が分割されて上座下座の区分があったとの事実を導き出すことができた。席次や式次第など、宮廷儀礼の具体的な内容からはスルタンと廷臣との関係や宮廷組織の構造を読み取ることができる。同時に、服装や宴会における食事など文化史に関する情報を多く含むものである。

これに加えて、16世紀後半のスルタン親征時に設営された天幕の細密画の分析もおこなった。スルタンの大天幕が帷幄で囲まれて幕営地が設営される様子が描かれる。興味深いのが帷幄の入り口部分に描かれた仮設の高楼で、これはイスタンブルでスルタンが祝祭見物する際にも設営されるものである。他のテュルク系王朝では同等の設備があったとの記述がないため、これはオスマン朝宮廷の幕営に特有のものであり、実は宮殿にあった高層建造物を模したものであったと推測した。一般にオスマン朝では幕営の空間が固定化されて宮殿建築へと移行したとされるが、その逆の動きもあったことが示唆される。

またその前史としてオスマン朝の覇権以前のアナトリアで、ビザンツを含む諸勢力が大規模な宮殿を造営する力を失い、その代替として高層建造物が選択され謁見空間として用いられたことを文献史料の分析から明らかにした。オスマン朝が広大な中庭での宮廷儀礼を志向する以前にあった、高さを用いた王権の演出方法の存在を証明した重要な研究成果である。

学術業績のうち、『都市史学会』には、「船が買いたい 前近代イスタンブルと海上交通」を寄稿した。本稿はおもに社会経済史観点から都市社会を船という観点に着目して論じたものであるが、本科研費事業に関連してはスルタンのトプカプ宮殿からの出御と沿岸部の離宮、ならびにそこに至るまでの儀礼的な御船のあつかわれかたを考察した。

『危機の都市史』には、「征服と復興 オスマン朝期コンスタンティノポリス＝イスタンブルの再建に関する一考察」を寄稿した。これは 15 世紀半ばのイスタンブル再建のプロセスを考察したもので、都市内におけるオスマン宮殿の位置にくわえて、ゾーニング思想の芽生えを指摘したものである。

『地中海を旅する 62 章』では、古都ブルサならびに帝都イスタンブルの概論を寄稿した。いずれもオスマン宮廷が営まれて宮廷儀礼の舞台となったという点で本事業との関連が大きい。

最後に『トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざま』には、「国父のページェント - ムスタファ・ケマルと共和国初期アンカラの儀礼空間」を寄稿した。これは本事業で分析したオスマン朝宮廷儀礼の内容をもととして、20 世紀のトルコ共和国初期段階での都市儀礼と権力関係を考察したものである。オスマン朝末期スルタン即位時にイスタンブルでおこなわれた都市儀礼が基本的に、共和国の新首都アンカラでも踏襲されたが、軍事パレードの実施を契機としてその性格が変遷していく様を論述した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川本智史	4. 巻 6
2. 論文標題 船が買いたい！ 前近代イスタンブルと海上交通	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市史研究	6. 最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本智史	4. 巻 728
2. 論文標題 オスマン建築史・都市史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 51-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本智史	4. 巻 6
2. 論文標題 新刊紹介 宮下遼著『多元性の都市イスタンブルー近世オスマン帝都の都市空間と詩人、庶民、異邦人』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市史研究	6. 最初と最後の頁 151-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 川本智史
2. 発表標題 船が買いたい！ - 前近代イスタンブルと海上交通
3. 学会等名 2018年度都市史学会大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoshi Kawamoto
2. 発表標題 “Edirne: The Cradle of Ottoman Palatial Architecture in the 15th Century”
3. 学会等名 CIEPO(Comite International des Etudes Pre-Ottomanes et Ottomanes) 23rd symposium in Sofia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川本智史
2. 発表標題 13～15世紀アナトリア諸王朝の宮殿における高層建造物とその展開
3. 学会等名 2019年度日本建築学会大会(北陸) 学術講演会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 「都市の危機と再生」研究会（初田香成・岩本馨・栢木まどか・福嶋啓人・川本智史・岩城考信・鈴木真歩・登谷伸宏・岸泰子・高橋元貴・三宅拓也・青木香代子・満田さおり・赤松加寿江・東辻賢治郎・會田涼子）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 406
3. 書名 危機の都市史	

1. 著者名 松原康介・川本智史・阿部大輔・新井勇治・池田昭光・伊藤喜彦・鷓戸聡・江口久美・岡井有佳・岡北一孝・加嶋章博・柏木健一・加藤玄・川田清和・木田剛・喜田川たまき・木村周平・國府久郎・坂野正則・佐倉弘祐・ジラルデッリ青木美由紀・清野隆・高根沢均・田中英資・谷口陽子・錦田愛子・早坂由美子・樋渡彩・深見奈緒子・藤田康仁ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 400
3. 書名 地中海を旅する62章	

1. 著者名 小笠原弘幸・穂山祐子・今井宏平・上野愛実・沖祐太郎・柿崎正樹・川本智史・田中英資・濱崎友絵・山尾大	4. 発行年 2019年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 324
3. 書名 トルコ共和国 国民の創成とその変容	

1. 著者名 布野修司編著・川本智史・青井哲人・青木香代子・赤松加寿江・阿部大輔・池尻隆史・伊藤大介・伊東未来・稲益祐太・井上悠紀・今川朱美・岩崎耕平・岩田伸一郎・上田哲彰・上西慎也・宇高雄志・内海佐和子・姥浦道生・江口久美・黄蘭翔・黄麗玲ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 976
3. 書名 世界都市史事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----